

巻頭言

附属病院看護部と医学部看護学科の連携強化を目指して

大名 美記子

奈良県立医科大学附属病院 看護部

1992 年に「看護師等の人材確保の促進に関する法律」が施行され、看護基礎教育の大学化が急速に進んだ。しかし一方では、教育と臨床との乖離が叫ばれるようになり、これらの社会的変化を受けて、国民のニーズに対応できる看護職者を育成するために教育の質を向上させる看護教育の在り方が検討された。

本学、附属病院看護部と医学部看護学科との連携においても例外ではなく、看護学生の附属病院就職率の低さからも相互の連携の弱さは垣間見れた。これには、看護学科の教員は教育職、附属病院の職員は医療職と異なっていることも影響でしょうか？これらの事から相互の連携を強化し、学生の附属病院就職率を高めるため、平成 20 年 4 月に看護学科教授が附属病院副院長（看護部長）に登用された。歴史的変化であった。

その後、平成 22 年度「看護部・看護学科連携ワーキング」が発足、3 つのワーキンググループを形成させ、教育・研究・研修・職場環境などにおいて双方が連携して取り組みを始めた。取り組みの成果として平成 23 年には「看護学科在学生、既卒者における進路に関する意識調査」を実施し（奈看護紀要 VOL.9.2013 報告）、24 年 8 月には「看護教育講師称号付与制度」が発足、専門基礎科目、専門科目等に附属病院の看護師が教育講師として派遣させ、大学に出向き、講義や演習支援等を行なっている。医療を取り巻く環境の変化が著しい昨今、看護技術についてもその変化をタイムリーにキャッチし、柔軟に対応出来るのが臨床現場の強みであり、教育の場へ伝えていくことで大いに役立っていると考えます。

本学の中期目標・中期計画の取組で看護実践・キャリア支援センターが昨年 4 月に設置、運営が開始された。これまでの「看護部・看護学科連携ワーキング」活動は発展的解消となり、看護実践・キャリア支援センターがその役割を担う事になる。組織化されたことで看護部と看護学科相互の情報共有や連携はこれまで以上に容易になり、有機的に機能すると期待ももてる。相互の連携を通して看護学科卒業生の附属病院就率の向上は課題であった。26 年度看護学科卒業生の附属病院就職者は 52 人（63%）と、これまでの県内就職（最高 50 人）をあわせても、法人化以来最も高い就職率である。学生が附属病院を選ばなかった理由に「職場の雰囲気、人間関係」が優位に聞かれた。このことを真摯に受け止め、看護学科教員の理解と協力、教育支援を頂きながら実習環境調整、学生との対話の機会、職員資質向上等に取り組んだ。努力が報われた思いである。

看護部と看護学科の連携・協働することは、学生に対する現実的教育モデルを示し、それにより、学生は附属病院を自分たちの病院であるという意識につながると願う。相互の強みも弱みも尊重し、補完し合う連携は学生の役割モデルとなり、また、自然体で看護を楽しむ姿を示すことが現職者にしか出来ない何よりの教育であると思う。